Twinkle 東京女子医科大学学術リポジトリ

Title	Effect of 3 years of treatment with a dorzolamide/timolol (1%/0.5%) combination on intraocular pressure
Author(s)	武田, 桜子
Journal	2014
URL	http://hdl.handle.net/10470/30891

Twinkle:Tokyo Women's Medical University - Information & Knowledge Database.
http://ir.twmu.ac.jp/dspace/

主論文の要約

Effect of 3 years of treatment with a dorzolamide/timolol (1%/0.5%) combination on intraocular pressure

(1%ドルゾラミド/0.5%チモロール配合剤での眼圧に対する 3 年間治療の効果)

東京女子医科大学眼科学教室

(主任: 飯田知弘教授)

武田　桜子

Clinical Ophthalmology 2014,8 :1773-1782 に掲載

【目的】

緑内障に対する 1%ドルゾラミド/0.5%チモロール配合剤 (DTFC) の眼圧下降効果を 3 年間評価する

【対象および方法】

単剤もしくは多剤併用療法 (β遮断薬、炭酸脱水酵素阻害薬、プロスタグランジン作動薬)で治療中の原発開放隅角緑内障と正常眼圧緑内障の患者 19 人を対象とした。DTFC にそれぞれ切り替えし、眼圧を 4-6 週毎に 3 年間測定した。

【結果】

切り替え前 14.1±2.9mmHg だった眼圧は、切り替え 3 ヶ月後 12.2±2.2mmHg、6 ヶ月後 11.8±2.4mmHg、12 ヶ月後 12.1±2.5mmHg、24 ヶ月後 11.6±1.8、36 ヶ月後 12.1±2.7mmHg と全ての期間で有意に下降した (全て $p<0.05$)。

平均眼圧下降率は切り替え 3 ヶ月後 12.0±13.0%、6 ヶ月後 14.5±14.2%、12 ヶ月後 12.2±18.7%、24 ヶ月後 16.0±12.8%、36 ヶ月後 12.8±15.2%だった。

カプラン・マイヤー法により、切替前の眼圧より 10%以上の眼圧上昇を眼圧コントロール不良と定義すると、眼圧コントロール成功率は 3 か月後 94.7%、6 か月後 94.7%、12 か月後 84.2%、24 か月後 78.9%、36 か月後 78.9%であった。

Cox の比例ハザードモデルを使った多変量解析により原発開放隅角緑内障が眼圧コントロール不良の危険因子として選択された。3 年の間角膜障害や炎症を

認めた患者はいなかった。

【考察】

DTFC に切り替えて 3 年間重篤な合併症もなく、眼圧は切り替え前と比べ平均 2mmHg 低下した。配合剤は多種類の緑内障治療薬と比較して１）費用が抑えられる、２）点眼回数を減らすことができる為アドヒアランスが良くなる、３）点眼回数が少なくなることより副作用発現率が下がる、４）2 本目の点眼時に 1 本目の点眼薬が薄まるのを避けられるために薬剤が効果的に働き、良好な眼圧下降が得られる、という点で優れている。1mmHg 眼圧が下がると視野障害進行リスクが 10％下がると報告されているが、平均眼圧がもともと低い日本人では切り替え後の眼圧下降率も低く出る傾向にあるにもかかわらず、本研究では切り替え後眼圧下降が 2mmHg 得られたということは、十分に効果が高いといえる。

【結論】

DTFC により 3 年という長期にわたる有意な眼圧下降が得られ、合併症も認められなかった。有効かつ安全な薬剤であり、今後の緑内障治療に役立つと考えられる。